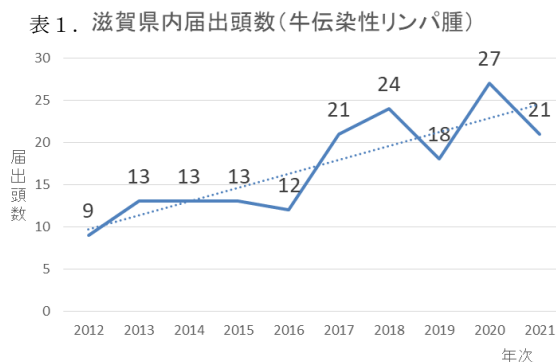


牛伝染性リンパ腫について

牛伝染性リンパ腫（令和2年7月に牛白血病から改名）は白血球の一種であるリンパ球が、牛伝染性リンパ腫ウイルス（BLV）によって腫瘍（ガン）化する、人のリンパ腫に似た病気です。感染牛は病気になりやすいなど、目に見えない経済損失があると考えられています。[出展：農場で牛白血病を防ぐために（JRA）] また、と畜場で発見された場合その牛の枝肉や内臓は全部廃棄となり、食用になりません。

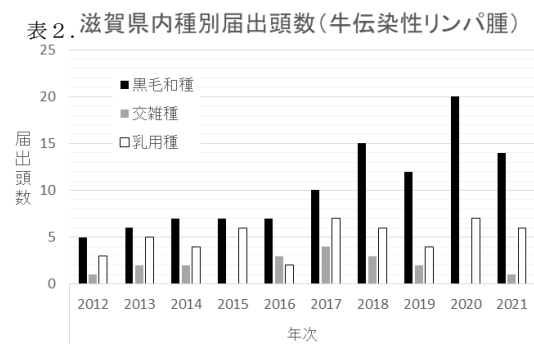
BLVは血液等を介して感染牛から他の牛に感染が広がるので、吸血昆虫を駆除する、BLVに感染していない牛から先に搾乳する、などの対策をしていないと、農場の中でどんどん感染牛が増えていきます。対策については、のちほど詳しく記載します。

牛伝染性リンパ腫の発症を獣医師が診断した場合、家畜保健衛生所への届出が法律で義務付けられています。県内では年々届出頭数が増えています(表1)。



種別における届出頭数を比べてみますと、近年は黒毛和種の届出が目立ちます(表2)が、滋賀県内では、肉用牛が約20,000頭、乳用牛が約2,500頭飼養 [出展：滋賀の畜産(滋賀県畜産課)] されていることを考慮すると、決して乳用種の届出も少なくはあ

りません。



これは、BLVに感染した牛が、必ずしも発症するわけではないというこの病気の性質が一因として考えられます。一般的に交雑牛は25か月齢前後、黒毛和種は30か月齢前後で出荷されますが、乳用牛は、肉用牛より長く飼養されます。乳用牛は長い時間農場に滞在する分、BLV感染後の時間も長く、それだけ発症牛が摘発されるのです。

前述しましたようにBLVは、血液(白血球)を介して感染します。人為的な感染拡大の原因は、注射針や直腸検査用手袋、耳標や鼻環装着器具の使いまわし、除角・削蹄・去勢等の施術時の不十分な止血および器具の消毒未実施などがあります。「そこまで完全に対策できないよ。」と思われるかもしれませんが、大切な対策ポイントですので、普段から確実な器具の交換および消毒、適切な止血を実施してください。

また、アブやサシバエなどの吸血昆虫を介した感染拡大も重要な要因です。殺虫剤噴霧、捕虫器具の設置および陽性牛の隔離飼育が対策の主体になります。

外部から牛を導入している農家では、導入した牛が牛伝染性リンパ腫に感染しているか検査することも大切です。「牛を導入し

たら返却はできないから検査しても仕方ない。」と言われることもあります。所有される牛の感染状況を把握し、対策することが感染を拡大させないための基本です。検査結果のある牛を導入するケースも最近が増えてきていますので、家畜商さんに相談することも大切です。

その他、哺乳・搾乳・直接接触等が感染要因になりますが、血液だけでなく、乳中に白血球が含まれるので乳汁も感染拡大の原因になります。

家畜保健衛生所は、牛伝染性リンパ腫のまん延防止、清浄化を支援していますが、指導が難しいのが抗体陽性率 30～70%の農場です。農場によって病気に対する考え方、他の課題との優先度が違うので対策しても十分な効果を感じていただくことが難しい場合も多いように感じます。そのような場合は個別に説明をさせていただきますが、重要なポイントは陽転率です。陽転率は前回検査時に抗体陰性だった牛のうち、今回陽性となった牛の割合です。この数字が“0%”であればまん延は防げていますが、それ以外ですと病気がまん延していますので、何らかの対策が必要です。

なお、抗体検査は、機械が陽性標準の発色の強さと検体の発色の強さを比較して結果判定をしています。そのため以前の判定から逆転することがありますが、病気自体は過去に抗体陽性と判定された牛が陰性にな

ることはありません。一度でも陽性の判定があった牛は抗体陽性牛（牛伝染性リンパ腫に感染している）と考えてください。ここで強調したいのは検査結果を捨てないでほしいということです。

最後に繋ぎ式、労働力 1 人、30 頭規模の酪農家での事例を紹介いたします。吸血昆虫対策として殺虫剤噴霧、牛の並び替え（風向き、吸血昆虫の分布、リスク順を考慮）、陽性と陰性牛の間に一牛床間隔を空けるなどの対策を実施しました。陰性牛から順番に搾乳し、外部導入があるため導入時検査を実施、初乳製剤は利用していませんでした。上記の農家では対策した期間は 4 年で終了しましたが、陽転率はゼロで推移しました。この事例では牛の並び替え、吸血昆虫対策、導入時検査が対策のポイントだったと思います。

牛伝染性リンパ腫対策をする場合、利用可能な補助事業もあります。滋賀県畜産振興協会が窓口の事業で、吸血昆虫に効果の認められた殺虫剤、捕虫器等について購入補助があります。その事業を活用し、陽転率ゼロを目指して是非対策をしていただきたいと思います。餌代や燃料代の高騰など経営環境が厳しい状況ですが、できそうなところは手を抜かず、少しずつ対策していきましょう。

（臼井、諸岡）